

台湾正名運動レポート

国造りへ邁進する台湾

台湾史上初の十五万人デモ行進

柚原正敬 ゆはら しょうけい
事務局長



会旗を先頭に総統府へ
向かう日本人デモ隊
(平成15年9月6日)

台湾正名運動発祥の地は日本

台湾に興味がある人ならともかく、大方の日本人にとって「台湾正名運動^{せいめい}」とはあまり聞き慣れない言葉かもしれない。そこで、昨年九月に参加した「台湾正名運動」の報告に入る前に、「台湾正名運動」やそれに至る経緯を説明したい。

台湾正名運動とは、台湾を主体とした意識の確立をめざす運動をいう。具体的には、その国名を「中華民国」から「台湾」に改め、新しい憲法を制定し、台湾名による国連加盟などをめざしている。

そもそも、台湾正名運動発祥の地はこの日本である。当時、在日台湾同郷会の会長をつとめていた林建良氏の発案による。

三年前の平成十三年（二〇〇一年）六月九日、在日台湾人の外国人登録証の国籍記載が

「中国」となっていることに耐え難い屈辱を覚えていた林氏ら^{（注）}在日台湾同郷会の人々は、「中国」から「台湾」への改正を求めて「正名運動プロジェクトチーム」を発足させたのが発端である。

それが台湾本土に移り、一昨年の「母の日」である五月十一日、母なる台湾への回帰を願い、台北市に三万五千人が集まってデモ行進を行った。そのときの総召集人（呼び掛け人代表）が李登輝前台湾総統だった。

さらに李登輝氏は、昨年の五月十一日に十万人規模で台湾正名運動を開催すると声明されていたが、春先からの「中国肺炎」ことサーズ騒動で九月六日に延期されたのだった。

ただし、日本では在日台湾同郷会を中心に日本人有志などが協力して「511台湾正名運動実行委員会」（陳明裕委員長・在日台湾同郷会会長）が組織され、五月十一日、外国

人登録証の国籍記載改正と台湾のWHO（世界保健機関）加盟推進を訴え、約三百人が新宿区内をデモ行進した。李登輝氏から懇篤な感謝のメッセージが届けられたことも印象深かった。

台湾史上初の大規模デモ

さて、私もが参加した台湾正名運動についてである。私どもは小田村四郎副会長を団長に、常務理事の黄文雄氏や林建良氏など五十三人が参加。本会として初めての公式訪台団でもあった。

昨年九月六日、台湾はまだ真夏である。台北の予想最高気温は三七度。朝から雲ひとつない快晴だった。朝のうちはそよいでくる風が心地良く感じられたのだったが、その風が熱風と化してしまうことは後述する。

日本からの参加者は十時半前、日差しが強くなる前にと、デモ行進の出発点である中正紀念堂に集合していた。五月十一日のデモ行進で掲げた「台湾のWHO加盟を支持する」などと書かれた横断幕やプラカード、あるいは日章旗や団体旗を掲げ、予定どおり正午に出発。デモ行進の先頭には、小田村団長、金



日本隊は300名を超えた

美齡氏、林建良氏、新潟李登輝友の会支部長の伊藤栄三郎氏などが立ち、總統府前の広場をめざして行進していった。

それにしても、この日の暑さは半端ではない。車道の片側を行進しているので、天をさえぎるものはない。灼熱の太陽が容赦なく照りつける。コンクリートの地面は熱く焼かれ、照り返しがきつい。午前中までそよいでいた風が熱風と化して襲ってくる。アツという間に全身汗みずくとなった。

このデモ行進は中正紀念堂や国父紀年館など台北市内七ヶ所から出発、仁愛路、中山北路、信義路などの幹線道路から、会場である總統府前のケタガラン（凱達格蘭）大道を仕切ってつくられた広場をめざして集結した。

雲霞のごとく、とはこのことか。總統府前の群集はもとより、その周辺にも、台湾全土から集まった人々が行き交っている。木陰にも、冷房の効いたバスの中にも人、人、人だ。後から後から人が湧いてくる。いったい何人が参加しているのだろうか。

式典の途中で司会者から参加者十五万人と発表され、会場内はどよめいた。台湾の歴史はじまって以来初めての大規模デモだった。

午後一時四十分、一緒にデモ行進に参加した李登輝氏が会場に到着し、群衆の盛り上がりは最高潮に達した。「タイワンラン（台湾人）！ タイワンコク（台湾国）！」「アワイペアーカーユウ（李登輝さんガンバレ）！」というシュプレヒコールが鳴り響いた。

李登輝氏はまず広場の通路を往復して、集まった人々に挨拶して回り、それから壇上に立たれた。曾文恵夫人や国策顧問で全国共同招集人である黄昭堂氏、日本から駆けつけた同じく国策顧問で日本の招集人である金美齡氏などが共に壇上に並び立っていた。

八月末、日本から主治医である倉敷中央病院の藤堂医師が渡台して心臓のカテーテル手術を施している。それからまだ半月と経っていない。手術後初めて公の場に姿を現されたという。満を持しての登壇だったようだ。血色はよく、その声にも張りがあった。

演説内容は「中華民国不存在論」だった。群集は寂として聞き入っている。ときどきワツと歓声があがり、拍手が起きる。台湾語

を理解できない私に対して、林建良氏がボイントのところを同時通訳してくれた。李登輝氏は、中華民国の歴史と台湾が無関係であることを史実にのっとって説明されていた。

同じ悩みを抱える台湾と日本

台湾が抱えている問題は、日本の問題とよく似ている。国号問題こそ違い、憲法問題、教科書問題など、国民としての誇りを取り戻そうという点では、まったく変わらない。台湾は台湾人としてのアイデンティティを求め、日本は歪んだ歴史認識を正そうという同質の悩みを共有している。台湾の親日ぶりがその共有感を深めている。これが、安全保障上の問題とも絡んで、日本人が台湾を大事だと思ふ所以の一つでもある。

会場からの帰り道、若いカップルに「日本からですか」とたどたどしい日本語で声を掛けられた。そうだと答えると、満面の笑みをたたえて「有難うございます」という。こんな一事に、台湾が確実に変わってきていることを実感させられる。十五万人という数字がけっして誇大ではないことを肌身で感ずるのである。